

では、私の方から少しお話をさせていただきます。一応、このような形で進めたいと考えておりますが、私の言葉では少々不十分な部分もありますので、原稿を作成いたしました。

その原稿を要約していただき、それをもとに私からお話をさせていただくという形を、まず一つ取りたいと思います。その後、皆さんの方から内容に関して分からない点についてご質問をいただいたり、ご意見を述べていただきたいと思いますっております。

特に指名などはいたしませんので、自由に「ここがどういう意味なのか」「ここが分からない」といった形で質問をしていただければと思います。私の分かる範囲内でお答えさせていただきますが、分からない場合は、「分かりません」と胸を張ってお答えさせていただきますので、どうぞよろしくお願いいたします。

最後に、私の「妄想」という言い方をしておりますが、これは聖書を学びながら私自身が抱いた疑問について、私なりの答えを持っております。それを皆さんに投げかけながら、共に学び合う場を作っていきたいと考えております。

なぜそのような形を取ろうとしたのかといいますと、使徒の働きの時代の学びのスタイルというのは、どちらかというと一方的な説教ではなく、喧々諤々と議論しながら話し合っていくスタイルだったからです。今回は礼拝ではありませんので、皆さんには自由にお話していただければと思います。

ただし、話題が使徒の働きから逸れないようにお願いいたします。話が脱線してしまう恐れがあるからです。まず最初に、皆さんに聖書を読んでいただきたいと思います。よろしいでしょうか？

読み方としては、レジュメに記載されている1・2・3・4・5という順序に沿って読んでいただければと思います。

このレジュメの下の方に「成長の締めくくり箇所」と書かれておりますが、これは使徒の働きが、ルカによって書かれたとされていることに関係しています。ルカは内容を一つの塊ごとに区切り、順を追って発展・成長していく形で記述しています。その締めくくりが、全部で7箇所あるとされており、その箇所がレジュメの下に書かれております。

ご自宅に戻られた後、お時間があればその箇所をお読みいただければ、「ああ、このようにまとまっているんだな」と感じていただけるのではないかと思います。

私の方では、それらの箇所にこだわることなく、今回は時間の都合もありますので、1回でお話を進める形を取らせていただきます。

さて、なぜこの「使徒の働き」を取り上げたいと考えたかと言いますと、単純な理由です。現在、火曜日の学習会で「使徒の働き」を取り扱っておりますので、そのPRも兼ねて、この場で全体像を掴んでいただければという思いで、このテーマを選ばせていただきました。

火曜日の学びでは、かなり細かい部分まで丁寧に取り扱いしておりますが、今回は全体のイメージを掴んでいただければそれで十分だと考えております。

1.まず、「始めに」と記載しておりますが、「使徒の働き」はルカの福音書の続編であるということを、まず押さえておいていただきたいと思います。ですから、ルカの福音書と使徒の働きは、セットで書かれていると理解できます。

ただ、使徒の働きの最後の言葉を見ると、少々尻切れトンボのように終わっているのが分かります。この使徒の働きがカバーしている期間は正確には不明ですが、一般的には約30年とされています。

その根拠は、使徒の働きの中では、ネロ皇帝の迫害やエルサレムの崩壊といった大きな歴史的事件には触れられていないからです。そうした出来事が起こる以前に書かれたと考えられています。

この書では、ペテロとパウロの働きを中心に描かれていますが、それだけではなく、名もなき人々が福音を伝え、教会を建てていった姿も描かれています。例えばローマの教会は、パウロによって建てられたのではなく、散らされていった信徒たちによって家庭集会という形で始まったと考えられています。

私自身も、この学びを通して、神様が働かれたこと、そしてその背後に聖霊が働いておられたことを改めて噛みしめているところです。

2.では、2番目として「聖霊降臨と教会の誕生」ということがあります。

先ほど読んでいただいた箇所というのは、その前段にあたる部分なんですね。たとえば、落語などと言うところの“前座”にあたる部分です。それが「40日の出来事」なんです。

どういうことかという、イエス様が復活されて、そして40日後に天に昇られます。これを短いとを感じるか、長いとを感じるかは人それぞれだと思いますが、私にとってはすごく長いという印象がありました。

なぜそう思ったかという、それぞれの福音書を見ると、この出来事はだいたい1章で片付けられているんですね。非常に短く描かれています。ですから、以前はそんなに長くは感じていなかったんですが、改めて読んでみて、「あ、そうなんだ。40日間もイエス様は復活された後、弟子たちと一緒にいたんだ」ということを考えさせられました。

では、なぜその期間、イエス様は弟子たちと一緒にいたのかという、大きく2つの理由があります。

1つ目は、イエス様が復活されたという“事実”。これは正直に言って、誰もが簡単には信じられない出来事です。でもイエス様は、確かに復活されたのだということを弟子たちに分らせるために、さまざまな形でご自身を現されました。姿を見せたり、話をされたり、交わりを持たれたり、時には手を触らせ、体に触れさせたり、また一緒に食事をされたりして、「私は復活したんだ」ということを明らかにされたのです。

この「復活の確信」が、クリスチャン、特に使徒たちにとっては、これから働いていくための前提であり、土台なんですね。ここが崩れてしまったら、もう何もできなくなってしまいうわけです。ですから、その土台をしっかりと持たせるために、復活の事実を証明された。これが1つ目です。

もう1つは、弟子たちの前で「神の国」について語られたということです。

「神の国」とは何かというと、ここにも書いておきましたが、「神様が支配される領域」のことです。完全な意味で神様が支配されるというのは、イエス様が来られて、そして再び来られるという約束を果たされる時のことです。

その時には、新約聖書で言えば『黙示録』の21章、22章にあるような世界が実現するわけですが、そうではなくて、イエス様の十字架の死と復活によって、新しい「神の国」がすでに動き始めているとも言えると思います（言い方が正しいかは分かりませんが）。信じた人々の心の中に、そして教会の中に「神の国」が始まり、それが次第に広がっていく

。そして、その中で神様の御心がなされる世界——それが「神の国の拡大」ということになるわけです。

では、なぜこの「神の国」について語る必要があったのか。

というのも、一般の律法学者はもちろん、サマリア人や群衆、さらには弟子たちも含めて、皆が同じような考えを持っていたからです。

どういう考えかというと、「メシアが来る」とはどういうことかという点です。ここで言う“メシア”とは“キリスト”、“救い主”と理解してください。

彼らは、自分たちが当時ローマ帝国に支配されている状態から、政治的に解放されることを期待していました。そして、それは神様の支配によって実現されると信じていたのです。もっと具体的に言えば、「ダビデの血筋を引く者によって自分たちが支配されるようになる」と望んでいたわけです。

そういった期待を持っていた彼らは、イエス様が現れた時に、さまざまな“印”や奇跡を行われるのを見て、「この方こそがメシアだ」と理解し始めたのです。

ところが、だんだんとイエス様の働きは、そうした政治的に革命を起こすような動きではなく、病気の人を癒したり、さまざまな苦しみにある人たちを助けたり、そしてさらには「自分は十字架にかかって死ぬんだ」と、イエス様ご自身が明らかにしていかれたんですね。

弟子たちが思い描いていたこととは、方向が違っていたんです。それゆえ、あのユダは裏切ったんです。ユダがなぜ裏切ったのかというと、「自分の期待していたメシアではない」と感じ取ったからです。

群衆やパリサイ人たちは、その前からすでにイエスに背を向けていましたけれども、それでも弟子たちは、なお期待を抱いていたんですね。群衆の中にも一部には期待がありました。

だからこそ、イエス様がエルサレムに上られた時、みな「ホサナ、ホサナ」と言って歓声をあげ、「さあ、これから新しい国ができるんだ」というイメージで受け取ったわけですから。

しかし、イエス様はあっけなく十字架にかかってしまった。そこに弟子たちの「絶望」がありました。また、そこにはペテロがイエス様を裏切ったという「後悔」もあり、さまざまな感情が交錯していたわけです。

そんな葛藤や自己嫌悪に苦しんでいた弟子たちに、イエス様は現れてくださいました。そして、あのペテロに癒しを与え、三度も「私を愛するか」と呼びかけて、ペテロをもう一度立ち上がらせてくださったのです。他の弟子たちにも、同じように再び立ち上がる機会を与えるための時間、それが40日間だったということです。

また、その期間において、イエス様は弟子たちに霊的な理解も与えられた、ということが言えるでしょう。

そして次に訪れるのが「五旬節」、ペンテコステと呼ばれる日です。正式には「五旬節」ですが、これはユダヤの祭りのひとつなんです。

どんな祭りかというと、「過ぎ越しの祭り」の50日目に祝われる祭りです。過ぎ越しの祭りというのは、イエス様が十字架にかかったその時期の祭りでもあります。イエス様は、わざわざ過ぎ越しの祭りの時期にエルサレムに來られました。

なぜなら、過ぎ越しの祭りにおいては「子羊」が犠牲として捧げられるのですが、その「子羊」として、ご自身を重ね合わせて捧げるためだったからです。ご自身を犠牲として、十字架にかかるために、過ぎ越しの祭りにあわせてエルサレムに來られたのです。

そしてその後、50日目に「五旬節」が訪れます。この五旬節というのも祭りであり、意味があります。

主に2つの意味がありますが、1つはシナイ山でモーセが十戒を授かった日を記念するもの。そしてもう1つは「小麦の収穫の祭り」とも言われますが、どちらかというと初期の意味合いは「十戒を授かったことを祝う祭り」だったと言えるでしょう。

十戒——つまり律法の象徴的なもの。それは旧約聖書の中でユダヤ人に与えられた「決まり」ですね。「これを守りなさい」という命令です。

しかし、イエス様が十字架にかかる前の「最後の晚餐」の場面、すなわち「過ぎ越しの祭り」の場面において、イエス様は「新しい約束です」と言われるのです。

それが、『ヨハネによる福音書』13章34節の言葉です。

「私はあなたがたに新しい戒めを与えます。互いに愛し合いなさい。私があなたがたを愛したように、あなたがたも互いに愛し合いなさい。」

これが、イエス様が新たに与えてくださった「新しい契約」です。

このことについて、パウロは『第2コリントの手紙』3章3節で次のように述べています。

「あなたがたが、私たちの奉仕の結果としてのキリストの手紙であることは明らかです。それは、墨によってではなく、生ける神の御霊によって、石の板ではなく、人の心の板に書き記されたものです。」

かつては律法が「石の板」に書かれていたけれども、今度は「心の板」に、聖霊によって書き記されたというわけです。

この新しい契約の根本は何か——それを一言で言うならば「愛しなさい」です。

「私があなたがたを愛したように、あなたがたも互いに愛し合いなさい」というこの言葉が、新しい契約の本質です。

これまでの契約は、「これを守りなさい」「これを行いなさい」という形の命令でしたが、イエス様が十字架で死んでくださり、その愛を示してくださったからこそ、「互いに愛し合いなさい」という新たな決まりが与えられたのです。

これが「新しい契約」と呼ばれるものです。

そしてペンテコステの日、聖霊が人々の中に下ってきました。その時、ペテロが説教を行い、3000人が救われたと記されています。

その時に初めて「教会」が誕生しました。

では、教会とは何か——そのことを考える時、聖書を読んでおられる方ならすぐに思い浮かぶのが、ペテロの信仰告白ではないでしょうか。

「あなたは、生ける神の子キリストです。」

このように、信仰告白がなされるわけです。

その時にイエス様は、「あなたのその告白の上に、教会を建てる」と言われました。これが、教会の土台となる重要な言葉です。

さらに、新しく教会が誕生した時に、弟子たちは「交わりを持ち、聖書の学びを行う」という印が記されています。

つまり、そうしたことを行っていくのが教会の本質なのです。

さて、パウロは『エペソ人への手紙』2章20～21節に、このようなことを語っています。

「使徒たちや預言者たちという土台の上に建てられていて、キリスト・イエスご自身がその要の石です。このキリストにあって、建物全体が組み合わされて成長し、主にある聖なる宮となります。」

これが「教会」なのです。

ここで言われている「使徒たちや預言者たち」とはどういう意味かというと、この当時、まだ聖書が完成していなかったという背景があります。旧約聖書は「律法と預言者の書」という形でまとめられていましたが、新約聖書はまだ書き記されている途中だったんですね。

ですから、「使徒たちや預言者たち」という表現は、新約聖書の教えを象徴的に指していると理解してもよいと思います。要するに、イエス・キリストを「要の石（かなめのいし）」として、その上に使徒たちの証しと教え——すなわち新約聖書の教えを土台として、教会が建てられていった、ということです。

つまり、この「土台」とは何か？ それはまず第一に、イエス・キリストの語られた言葉。そしてその周りを固めるのが、使徒たちを通して与えられた教え——新約聖書の内容です。

ここから分かるのは、「聖書そのものから離れてしまった教会」というのは、ありえないということです。このことを、私たちはしっかりと理解しておく必要があります。

---

そして、3番目のポイントに入ります。

**\*\*「ステパノの殉教と、使徒たちの離散」\*\***という出来事です。

教会が成長する中で、サタンの働きも始まります。その象徴的な出来事が、ステパノの殉教でした。

当時の教会には、「ギリシャ語を話すユダヤ人」と「ヘブライ語を話すユダヤ人」、つまり言語の違う人々が一緒に集まっていました。言葉が完全に通じ合わないことで、教会内でも様々な行き違いや不満が生じていたのです。

特に問題になったのが、やもめ（夫を亡くした女性たち）への支援でした。現在のように国や自治体が福祉を担っている時代ではありませんから、教会が福祉的な働きを担っていたわけです。多くのやもめたちが教会に来ていたのですが、その中でも特に「ギリシャ語を話すユダヤ人」たちは、ディアスポラ（離散）していたユダヤ人たちでした。

彼らは、ある思いを持ってエルサレムに来ていたのです。当時、「エルサレムで死んだ者の方が、先に復活する」という俗信のような教えが広がっていました。それもあって、多くの人々がエルサレムに集まっていたわけです。

その中で、やもめたちへの配給に不公平があるという苦情が起きました。

それを受けて、12人の使徒たちは「信徒の中から選びなさい」と言って、ステパノをはじめとする7人の奉仕者（執事）を選出するよう指示しました。この7人が、教会の福祉を担うために選ばれたわけです。

その中にいたのが、ステパノです。彼は事務的な才能に優れていただけでなく、伝道にも非常に熱心でした。

しかし、彼の情熱的な伝道のゆえに、人々の中に反発と怒りが生まれていきました。そしてついに、人々は彼に石を投げつけて殺してしまったのです。

ステパノは、殺されるその時にも、群衆を責めるのではなく、天を仰ぎ見ていました。そしてイエス様と同じように、最後の祈りを捧げるのです。

「主よ、この罪を彼らに負わせないでください。」

その姿は、本当に輝いていて、聖書の中でも非常に印象深い殉教の場面として描かれています。

---



この後、ステパノの殉教によって大きな迫害が起こり、弟子たちはエルサレムから四方に散らされていきます。ここから「福音」がユダヤの地を越え、サマリア、そして異邦人の地へと広がっていく道が開かれていくのです。

そうしたステパノの死を目撃するのが、このパウロであり、また他の人たちもそれを目撃しました。そして、それによって悔い改めに至れば良かったのですが、そうではなく、ステパノの死をきっかけにして、ますます迫害が激しくなっていたのです。

人々はもはやエルサレムにいらなくなり、ある者はユダヤ地方へ、すなわちヘブル語を話すユダヤ人たちはその地に散らされていきました。一方、ギリシャ語を話すユダヤ人たちは、もともと離散の民でもありましたので、エルサレムから離れて他の国へと逃げていきました。

しかし、ただ逃げるのではなく、御言葉を語りながら逃げていったのです。ですから、彼らの心の中には、まだ余裕があったわけです。本当に福音を語り、人々に福音を伝えながら逃げて、そこに教会を作って、だんだんと広がっていきました。

そうした出来事の中で、パウロが救われます。パウロの救いの出来事については、皆さんもよくご存知だと思いますので、ここでは省略しますが、彼は異邦人伝道のために救われ、イエス様と出会って、そして導かれていきました。

その後、第一次伝道、第二次伝道、第三次伝道と進んでいき、最初はトルコ中部あたりまで行って伝道しました。さらにその範囲は広がり、最終的にはローマにまで至るのです。

ローマに行くのは、彼自身が望んだ形ではなく、捕囚という形によって伝道のために行くことになります。しかし、どこへ行っても、そこで御言葉を伝えたということが最後に書かれています。

このパウロの伝道の中には、私自身が見て、特に二つの特色があると感じています。

一つは、パウロが異邦人伝道に遣わされているにもかかわらず、どこへ行ってもまず会堂（シナゴグ）に行くということです。彼は会堂で福音を語り、ユダヤ人に向けて話をします。しかし、多くの場合、ユダヤ人たちは彼の語る内容を受け入れず、彼を追い出してしまします。

そのときパウロは、「あなたがたから福音は取り去られ、異邦人に伝えられる」と言い、その町を後にします。そして別の町に行くと、また同じように会堂で語ります。会堂がなければ、今度は川に行って語ります。

なぜ川なのかというと、会堂というのは、13歳以上の成人男性が10人ほど集まれば設立できる、今で言う集会所のような場所です。それすらないような小さな町では、川辺に数名の人が集まり、御言葉を学び、また洗礼を受けたりします。川なら洗濯もできますし、実用的でもあります。

パウロも川に行って伝道し、人々を信仰に導いています。それでもユダヤ人がいなくなってしまうと、今で言う「あまたの議論好きな人たち」が集まっているような場所、つまり哲学者や知識人がいるアゴラのような場所に行き、福音を語ります。

そのようにして、福音の伝達の対象が、徐々にユダヤ人から異邦人へと移っていくのです。異邦人は信じて救われていく一方で、ユダヤ人は次第に救いに応じなくなっていく。そのような傾向が現れてきます。

もう一つの特色は、パウロが非常に頑固で、気性が激しい人であるということです。

たとえば第一次伝道旅行のとき、バルナバと共にマルコという青年を連れて行きましたが、途中でマルコは「こんなはずじゃなかった」と思ったのか、逃げ出してしまいます。苦しい伝道の旅の中で殺されそうな目にも遭いながら、パウロは福音を語り、目的地に到達すると、近道を使わずに、あえて再び危険な町に戻っていくのです。

第二次伝道旅行のとき、またバルナバと一緒にしようという話になりましたが、バルナバはマルコを連れて行こうとします。マルコは彼の親戚でもあったのです。しかしパウロはこれを拒否し、意見が対立して、最終的に別々のルートを取るようになります。

個人的に見ると、パウロはアンテオケ教会に招かれましたが、それはバルナバが彼を招いたものでした。バルナバが自ら彼を迎えに行き、それだけ彼に対して信頼と期待があったのです。

それでもパウロは、自分の信念を曲げずに行動した頑固な人物でした。しかし、彼がいつも自己主張だけを通していたわけではありません。

パウロは、自らの伝道計画を少なくとも二度書き換えています。最初はエペソ（アジア）に行って伝道したいと考えていましたが、それが閉ざされたとき、「聖霊によって妨げられた」と信仰的に受け止め、別のルートに進みます。

マケドニア人の幻を見たときも、神様の導きと受け止めて、計画を変えてマケドニアへ行き、そこからさらにギリシャへと進んでいきました。最終的には、念願だったエペソに行くこともでき、その地にとどまって周辺地域を伝道することができたのです。

このように、神の導きと確信したときには、彼は自分の計画を手放す柔軟性を持っていた人物でもあります。

そして、最終的には「アジアではもう働くべき場所がない」と悟り、ローマへ、さらには当時の「地の果て」であるスペインへと伝道したいという夢を抱きました。神様は彼をローマへと導かれますが、それもまた彼の望んだ形ではなく、捕囚という形で連れて行かれるのです。

けれども、捕らわれの身となっても、ローマで彼は2年間、自宅軟禁のような状態で福音を語り続けることができました。最初はユダヤ人が訪ねてきて、パウロは彼らに福音を語りますが、彼らは御言葉を受け入れず、次第に異邦人、すなわちローマの人々がやって来るようになり、福音がさらに広がっていくことになります。

最後に、使徒の働き28章31節にはこう記されています。

「少しもはばかりことなく、神の国を宣べ伝え、主イエス・キリストのことを教えた。」

ローマに行って御言葉を伝えたということでもあります。

終わりに入りますけれども、このパウロの働きというのは「未完だ」と、いうふうを書いておきました。パウロはこの後に解放されるという見解があります。私もそう思います。なぜかという、ローマの兵隊も、また上の人たちも皆、パウロに対して好意的だったからです。

しかも、ローマの人たちは信仰に関することについては一切干渉しませんでした。その頃は、どうかという「事実」を問題にしていたのです。

パウロの『使徒の働き』を見てもわかるように、反逆的なことは一切しておらず、おそらく2年後に解放されたと思われます。

さて、『使徒の働き』の内容について、皆さんの方から何か質問がありますか？  
...と言いたいところですが、先に私自身の“妄想”を少しお話しさせていただきます。

私の妄想の中で、最も大きなものは正直言って二つあります。

一つは、パウロとステパノに接点があったのかどうか、ということです。

聖書によれば、パウロはステパノを殺す群衆の「上着の番」をしていたと書いてあります。そこに、初めてパウロが登場します。そしてステパノが殉教するのを、当然パウロは目撃したと思われます。

しかし、これは本当に“初めての接点”だったのでしょうか？

もっと以前に出会いがなければ、何か腑に落ちないのです。

なぜなら、単に上着の番をしていただけのパウロが、のちに迫害の中心人物になるというのは、少々不自然な流れではないかと思うのです。なぜ彼は、それほどまでに激しく変貌（変身）してしまったのか。

ステパノの死は、むしろパウロの心を打ち、深く突き刺した出来事ではなかったのか。

そんなふうに私は思いながら、もう一度聖書を読み直してみました。

聖書には、ステパノが殉教する前に、すでに迫害されていたことが書かれています。

それは「リベルテンの会堂」において、ユダヤ人たちと議論をし、争った末に大祭司たちの前に連れて行かれ、石打ちの刑にされた、という記録です。

このリベルテンの会堂とは、もともと解放奴隷のユダヤ人たちが属していた会堂であり、そこにいた人々の中にパウロがいたのではないか、と思わせる記述があります。

その会堂に属していた人々として、アレキサンドリア、キレネ、キリキア、アジアから来た人々が議論した、という記述です。

この中で「キリキア」に注目していただきたいのです。

パウロの出身地が、まさにキリキアだからです。

パウロは、離散のユダヤ人であり、しかもローマの市民権を持っていました。

この市民権は、いくつかの方法で得ることができました。

お金を払って買う、解放奴隷として特別に認められる、兵役によって獲得する、などです。

パウロがこのリベルテンの会堂に属していたとすれば、非常に優秀な人物であったと考えられます。

とはいえ、このパウロの背景が、どこまで『使徒の働き』の中に記述されているのか、私としても明確には断言できません。

これはあくまで、私個人の“妄想”の一つです。

さらにもう一つの妄想ですが、それは先ほど申し上げたように、パウロがまずユダヤ人に福音を伝えていたという点から始まります。

その後の記述を読んでいくと、9章以降の11章あたりまでに、その様子がよく分かります。

時間もなくなってきましたが、最後にもう一つ。

私の勝手な想像ですが、ユダヤ人たちが時間を稼ぐためにパウロの裁判を長引かせ、最終的には諦めてしまったために、パウロが解放されたのではないかとも思っています。

解放された後、パウロは再び御言葉を伝えるのですが、その数年後には、ローマ帝国による迫害が始まります。

これは、キリスト教そのものに対する迫害でした。

有名なのは、ローマで大火災が起きたことです。

この火災の原因が誰であったのかは歴史的にははっきりしていませんが、ネロ皇帝が関与していたという説が有力です。

いずれにしても、ネロはその責任をキリスト教徒に押しつけました。

クリスチャンたちは犯人としてでっち上げられ、残酷な迫害を受けました。

その中に、パウロもいたのではないかと考えられています。

## 続き

ステパノの殉教によって始まった迫害と、そこから福音がさらに広がっていく過程について、

### 4. 迫害と福音の拡大 — サマリア、異邦人へ

ステパノの殉教をきっかけにして、エルサレムの教会には大きな迫害が起こりました。これによって弟子たちは、エルサレムに留まることができなくなり、四方八方に散らされていきました。しかし、この「迫害」という出来事が、実は神の計画の中で「福音をさらに広げるためのきっかけ」となっていたのです。

最初に福音が届けられたのが、サマリアの地です。

サマリア人は、ユダヤ人とは長い間対立関係にありました。彼らはかつて北イスラエル王国の住民で、アッシリア帝国により征服された後、異邦人との混血が進み、ユダヤ人からは「不純な民」とみなされていたんですね。だから、ユダヤ人たちはサマリア人を避け、交わることもほとんどありませんでした。

でも、イエス様はそのような人々に対しても福音を届けるために、あえてサマリアを通り、サマリアの女性と語られたことがヨハネの福音書4章に記されています。

そしてこの時、エルサレムから散らされた弟子の一人、フィリポがサマリアに行き、そこで福音を語ると、人々が信じてバプテスマ（洗礼）を受けるようになります（使徒8章）。この出来事は非常に画期的でした。なぜなら、「純粋なユダヤ人」以外の人々が、正式に福音を受け入れた初めての例だからです。

その後、ペテロとヨハネがサマリアに派遣され、信じた者たちの上に聖霊が注がれるという出来事が起きます。これは、サマリア人に対しても、ユダヤ人と同じように神の恵みが注がれた、という明確な印だったのです。

---

### 5. 異邦人への福音の門 — コルネリオの回心

さらに神は、ユダヤ人でもサマリア人でもない、「異邦人」たちへも福音を届けるために、特別な導きを用意されました。それがコルネリオという人物の回心の出来事です（使徒10章）。

コルネリオはローマ軍の百人隊長で、つまりローマ人——完全な異邦人です。しかし、彼は敬虔な人で、ユダヤ人の神を恐れ、施しをし、祈りをしていました。ある日、彼は幻の中でペテロを呼ぶようにという神の指示を受けます。

一方、ペテロもまた幻を見せられ、「汚れた食物を食べなさい」と命じられるんです。ペテロはそれを拒みますが、神は「神が清めたものを、あなたが汚れていると言ってはならない」と告げられます。

これは、異邦人を「汚れた者」と見なすユダヤ人の価値観を覆すものでした。

その後、ペテロがコルネリオの家に行き、福音を語ると、その場で聖霊が注がれ、彼らは神を賛美し、信仰を受け入れました。これが異邦人が公に救いに与った最初の記録です。

この時、ペテロはこう言いました。

「神は人を分け隔てなさらないことが、よくわかりました。」（使徒10:34）

ここに、ユダヤ人と異邦人の間の「壁」が打ち破られたのです。

---

## 6. サウロの回心 — パウロ誕生

そして、さらに重要な人物が登場します。それがサウロ、後のパウロです。

このサウロは、もともとはステパノの殉教を黙認し、キリスト教徒を迫害する側の人間でした。彼は熱心なファリサイ派のユダヤ教徒で、イエスをメシアと信じる者たちを異端者と考え、徹底的に取り締まろうとしていました。

ところが、彼がダマスコにいるキリスト者たちを捕らえるために向かっていた途中、突然天からの光に打たれ、イエス様が彼に現れるのです。

「サウロ、サウロ、なぜ私を迫害するのか。」

この経験によって、サウロは全く方向転換されます。目が見えなくなり、3日間何も食べずに祈り続ける中、神は弟子アナニヤを通して彼の目を開かれます。そして彼はバプテスマを受け、クリスチャンとしての歩みを始めます。

このサウロが、後に「パウロ」と呼ばれ、異邦人への使徒として世界中に福音を伝えていく中心的な人物となっていくのです。

---

このように、ステパノの殉教という悲劇的な出来事が、実は福音がユダヤ人を越えてサマリア人、そして異邦人にまで広がっていくための導火線となりました。そして、異邦人伝道のために選ばれた器が、かつては教会を迫害していたサウロだったという、神の不思議な導きがそこにはあるのです。

## 「パウロの伝道旅行と教会設立」「教会が直面する課題と手紙による教え」「ヨハネ黙示録に見る終末的な教会像」など

### 7. パウロの伝道旅行と諸教会の設立

パウロは回心後、すぐに宣教活動を始めますが、最初は他の弟子たちからも恐れられていました。かつて教会を激しく迫害していた人物ですから、当然ですね。しかし、バルナバという人物が間に立って、パウロの真剣さと変化を証言し、信頼が生まれていきます。

その後、パウロは数回にわたる伝道旅行を行い、各地に教会を建てていきます。特に有名なのは、**3回の伝道旅行**と、最後のローマへの旅です。

---

#### 第一回伝道旅行（使徒13章～14章）

最初の旅では、バルナバと共にキプロス島、そして小アジア（今のトルコ）へと向かいます。ここで彼らはユダヤ人だけでなく異邦人にも福音を語り、多くの人が救われます。



しかし同時に、反対も激しくなり、いくつかの町では追い出され、迫害も受けます。それでもパウロたちは諦めず、信じた人々を励まし、教会を設立して、長老を立てるというパターンで、各地にキリストの体である教会を築いていきます。

---

## 第二回伝道旅行（使徒15:36～18:22）

この旅では、新しい仲間シラスと、後にテモテヤルカも同行することになります。マケドニアの幻を見たパウロは、神の導きと信じてヨーロッパへ渡り、ピリピ、テサロニケ、ベレヤ、アテネ、コリントといった町々で福音を伝えます。

ピリピでは牢獄に入れられながらも奇跡的に脱出し、看守とその家族が救われるという出来事もありました。アテネでは、哲学者たちの前で「知られざる神」について語る場面が印象的です（使徒17章）。

この旅を通して、福音はローマ世界の中心部に向けて力強く進んでいきました。

---

## 第三回伝道旅行（使徒18:23～21:17）

パウロは再び、以前訪れた教会を励ましつつ、新たに伝道を進めます。特にエペソでは長く滞在し、2年以上にわたって福音を宣べ伝えました。

エペソでは、偶像礼拝を中心とする文化と対立し、大きな騒動が起きます（使徒19章）。それでも多くの人々が偶像を捨て、イエス・キリストに従うようになります。

このようにして、異邦人社会の中にキリストの教会が確実に根を張っていったのです。

---

## ローマへの旅と最期

やがてパウロはエルサレムに戻りますが、そこでユダヤ人たちに捕らえられ、ローマ帝国の法廷で訴えられることになります。彼はローマ市民権を持っていたため、最終的にカイサル（皇帝）への上訴を行い、ローマへの旅に出ます。

ローマへ向かう途中には船の難破などもありましたが、最終的に到着し、そこで囚われの身となりながらも、福音を宣べ続けました。

このようにして、パウロは命をかけて各地に教会を建て上げ、その後手紙（エピストレ）を通して教会を指導していくことになります。

---

## 8. 教会の課題と手紙による教え

各地にできた教会は、それぞれ文化や背景が異なっており、さまざまな問題や課題が出てきました。たとえば：

これらに対し、パウロやペテロ、ヨハネ、ヤコブなどが書いた手紙が、新約聖書の多くを占めています。これらの手紙（書簡）は、「教会がどうあるべきか」「クリスチャンがどのように生きるべきか」を非常に具体的に教えています。

---

## 9. 教会の完成と終末的ビジョン（黙示録）

新約聖書の最後の書であるヨハネの黙示録には、教会の最終的な姿と、終末に向けたビジョンが記されています。

冒頭の7つの教会へのメッセージ（黙示録2～3章）では、各教会が持つ長所と問題点が指摘され、悔い改めと勝利の約束が語られます。これは、現代の教会にも深く適用できるメッセージです。

そして最終的に、\*\*「新しいエルサレム」\*\*が天から下ってきて、神と人々が永遠に共に住むというビジョンが示されます（黙示録21～22章）。

ここに、神の救いの計画の完成があります。

---

まとめ

教会は、イエス・キリストの十字架と復活を土台とし、聖霊によって誕生し、迫害の中でも拡大し、使徒たちの教えと手紙を通して整えられ、やがて神の国の完成を待ち望む共同体です。

教会とは、建物ではなく、キリストを信じる者の集まりであり、互いに愛し合い、励まし合いながら、主の再臨を待つ信仰の共同体です。

「現代の教会の課題と使命」、そして「教会と個人の信仰生活の関係」についてお話しします。

---

## 10. 現代の教会の課題と使命

### ① 課題：形骸化と形式主義

現代の多くの教会が直面している最大の問題の一つは、「形式だけが残って中身がない」ということです。

礼拝は行っている、プログラムもある、建物もある、でも「そこにキリストの臨在があるのか？」という問いが常に問われています。

イエス様が語られた「ブドウの木と枝」（ヨハネ15章）では、「わたしにとどまりなさい」と繰り返し語られています。キリストとの関係が生きていない教会は、実を結ぶことができません。

---

### ② 課題：一致の欠如と分裂

もう一つの課題は、教会間の対立や、内部の分裂です。

パウロもコリント教会に対して、「私はパウロにつく」「私はアポロに」「私はケパに」と派閥ができていることを戒めています（Ⅰコリント1章）。現代の教会も、教理や伝統、礼拝スタイルなどの違いから、しばしば互いに批判し合うことがあります。

しかし、イエス様は最後の祈りの中で、「彼らが一つとなるために」（ヨハネ17:21）と願われました。私たちの一致こそが、世に対する証しとなるのです。

---

### ③ 課題：社会との断絶

教会が「閉じられた共同体」になってしまう危険もあります。

本来、教会は「世の光、地の塩」（マタイ5:13-14）として、社会に影響を与える存在です。困難の中にある人々に仕え、貧しい人を助け、真理を伝え、癒しと希望をもたらす——これが教会の使命です。

福音とは、「教会の中だけで完結する話」ではなく、世のすべての人に開かれた救いです。

---

## 11. 教会の使命：福音宣教と弟子訓練

教会に与えられている使命は、明確にイエス様の言葉にあります。

### ① 大宣教命令（マタイ28:19-20）

「それゆえ、あなたがたは行って、あらゆる国の人々を弟子とせよ。…わたしがあなたがたに命じておいたすべてのことを守るように教えなさい。」

この命令は「牧師に対するもの」ではなく、「教会全体への命令」です。つまり、すべての信徒が「宣教と弟子づくり」の責任を担っているということです。

---

### ② 福音のあかし人となる（使徒1:8）

「聖霊があなたがたの上に臨むとき、あなたがたは力を受けます。そして、…地の果てにまで、わたしの証人となります。」

聖霊は、「内面的な満足感」だけのために与えられるものではありません。証人として生きるための力として与えられるのです。

教会は「自分たちの居心地の良さ」だけでなく、「外に向かって」出て行く使命を担っているのです。

---

## 12. 教会と個人の信仰生活の関係

### ① 信仰は個人的、でも孤立的ではない

確かに、信仰は個人と神との関係です。けれども、聖書は信仰を「共同体の中」で育て、守り、表すことを前提に語っています。

ヘブル10:25にはこうあります：

「ある人たちのように、集会をやめることはせず、むしろ励まし合い、かの日が近づいているのを見て、ますますそうしようではありませんか。」

「集まること」こそが教会の本質なのです。オンラインも用いられる時代ですが、それでも「顔と顔を合わせて交わる」ことの意味は失われてはなりません。

---

### ② 教会は互いに支え合う体（コリント第一12章）

教会は「キリストのからだ」であり、私たちは「その各部分」です。誰一人として、「必要ない人」はいません。目だけでは体にならず、耳や手や足がそれぞれの役割を果たして、全体として生きるのです。

このことから、一人の信仰は教会の助けを受け、教会も一人一人によって立てられるという相互関係があるとわかります。

---

### ③ 教会は訓練と成長の場

エペソ4章では、「教会は聖徒たちを整えて奉仕の働きをさせるための場所」とであると語られています。信仰は「救われて終わり」ではありません。そこから始まりです。

教会は、

であり、まさに「霊的成長の畑」です。

---

最後に：教会に生きるという選び

信仰生活は、個人と神との関係に始まり、教会という共同体の中で育ち、完成されていくものです。

教会は不完全です。傷つくこともあるでしょう。理想通りにいかないことも多いです。しかし、それでもキリストはその教会を愛し、ご自分の命を捧げられたのです（エペソ 5:25）。

だからこそ、私たちも教会を愛し、仕え、建て上げていく使命があります。

---

主は言われました。

「この岩の上に、わたしの教会を建てる。ハデスの門もこれに打ち勝てない」（マタイ 16:18）

この主の言葉を信じ、私たちもその「教会の一員」として、主の働きに参加していきましょう。